



■ 他者からの視点 ■

アメリカとカナダは隔たりつつあるのか？

デヴィッド ウェルチ
David A. Welch

トロント大学政治学部助教授

アメリカとカナダの関係について述べる時、例えばこの二つの国は防衛線としてではない、世界で最長の国境を接しているとか、あるいはアメリカとカナダは「特別な関係を」享受しているなどといった、言い古された表現がしばしば用いられる。このような常套句には常に真実の要素が存在しており、カナダとアメリカは、おそらく国境を接する世界のどの国々よりもよい隣人である。

「好む、好まざるとにかくかわらず」

アメリカ・カナダ関係において注目すべき点はその強固さである。また、世界最大の貿易関係も築いている。国境を越える人、情報、思想の双方向の流れは、ほかに類を見ないほど膨大で、二つの経済はきわめてよく一体化されている。さらに、両国は北アメリカの防衛において非常に密接な協力関係にもある。カナダ人の大多数にはアメリ

カに友人や親戚がいるし、また逆の場合も同様である。

北アメリカの歴史や地理、人口推移を考えれば、この両国関係の強固さは驚くには値しない。私たちが一つの国ではなく二つの国であることは、ほとんど偶然のようなものなのだ。独立戦争の際に、もし植民地13州のなかから約3万人の住民たちが英国への忠誠心から北へ逃走しなかったとしたら、現実には統一され、カナダとなった英国植民地も、アメリカ合衆国に参入する結果となっていたかもしれない。

しかし、このアメリカ、カナダ両国の密接な関係にも問題がないわけではない。これについては、カナダ社会信用党の党首、ロバート・トンプソンが「好む、好まざるとにかくかわらず、アメリカは私たちの友人である」と、最も確に表現している。経済的にはますます緊密になりつつも、両国はそれ以外の重要な局面において徐々に隔た

デヴィット・A・ウェルチ●ハーバード大学で博士号を取得。現在、トロント大学で教鞭をとるかたわら、同大学ピースアンドコンフリクト・スタディーズのジョージ・イグナティエフ・チェアを務める。Justice and the Genesis of Warで1994年Edgar S. Furniss Awardを受賞。このほか、Painful Choices: A Theory of Foreign Policy Change (近刊) など



りつつあるようだ。どのように、そして、なぜ隔たりつつあるのか、ここで考察してみたい。

より進歩的、革新的になったカナダ

両国をますます遠い存在としている要因は主に二つ考えられる。一つは価値観、そしてもう一つは国際政治事情である。この二つは言うまでもなく関連しているが、それぞれ別々に考察していくべきであろう。

アメリカは進歩的な革命のなかから誕生し、カナダは保守的にむしろ大英帝国の従属支配下にとどまることを選択した。このような過去とは裏腹に、いまやカナダのほうが明らかに、より「進歩的」あるいは「革新的」になっている。

これは主に、カナダもイギリスのように19、20世紀にファビアン社会主義規範を、アメリカよりもはるかに容易に、そして全面的に容認したためである。その結果、現在カナダには、国民

皆保険や公教育、手厚い社会的安全体制(セーフティ・ネット)などの重要なものに対する確固とした国民的合意が存在している。これらは、アメリカの新保守主義者たちが、「特権意識」を助長する「過保護国家」のあかしになる、として拒否しているものである。アメリカでは、徹底個人主義が国家理念においてより強力な要素とされている。「アメリカンドリーム」は、いまもなお、それぞれの努力によって、いかなるアメリカ人でも自立して裕福になることができるという希望のうえに成り立っている。

また、カナダはますます非宗教的の家となってきた。アメリカ人と比較すると、強い宗教心を持っているカナダ人は相対的に少ない。特に社会的にも政治的にも保守的傾向である福音主義キリスト教は、カナダ社会ではアメリカに比べごく少数派である。そしてまた、同性婚のような問題に対して先

に進んでいる。

「価値観の相違」が大きくなりつつあり、そして、人間は常に自分自身の価値観が正しいと思ってしまう傾向にあるため、カナダ人もアメリカ人もますます、それぞれが道徳的に他方に勝っていると思なすようになっていく。近年、このことで両国間の関係に敵対的な要素が持ち込まれ、ときには政治的対立を引き起こしている。

例えば、昨年のアメリカ大統領選でカナダ人は2対1以上の割合でジョージ・W・ブッシュよりもジョン・ケリーを支持し、その姿勢を隠そうともしなかった。また、過去数年、カナダの上級公職者や国会議員たちは概して反アメリカ的見解、特にブッシュ政権への侮蔑を、公然と表明している。そしてこれが、アメリカの報道におけるカナダとカナダ人に対するそれと同様の独善的な非難に拍車をかけることになった。このような非難論争は30年、40年前には考えられなかったものである。

イラク戦争を機に広がった溝

最近のこういった価値観の相違による敵対意識の多くは、一つ二つの要因、つまり国際政治事情にも反映している。この問題において、ワシントンとオタワは明らかに逆方向に進んでいる。アメリカがその外交議題を推し進めるうえで、より影響力を増し、より一国主義的、攻撃的になるにつれ、カナダは多国間主義や法治主義、そしてアメリカが頑として抵抗してきたグローバル政治（国際刑事裁判所や対地雷禁止条約など）という革新的手段を、ますます強く擁護するようになってきた。そして、2003年のイラク戦争は事態をさらに決定的なものとしてしまった。この問題に関し、カナダはかつてないほどアメリカに反発し、フランス、ドイツといった「旧ヨーロッパ」に同調して、公然とこのアメリカの戦争を批判したのである。

これらの事情によって、最近広がり

つつある溝だが、アメリカ・カナダ関係をこれまで常にも悩ませてきた問題はほかにも多く存在する。その多くが貿易に関するものである。最も深刻なものは継続中の軟質材木問題であるが、これは、1988年の加米自由貿易協定（CUSTA）のちに北米自由貿易協定（NAFTA）がこれに取って代わる）のなかに、交渉時の紛争解決機能を組み入れることをカナダが推し進めた大きな理由の一つである。

この場合、問題は両国間の価値観の相違ではなく、両国の経済規模、そして相互の貿易依存の不均衡にある。カナダは相手国の保護貿易主義の影響を、その逆の場合よりも大きく受けてしまう。また、アメリカではその政治体制の構造により、カナダに比べ、木材産業界の族議員のような議員たちが容易に国策を牛耳り、紛争解決を妨げることができるのである。

しかし、現実の、そして増大しつつあるアメリカ・カナダ間の相違や対立

にもかかわらず、ロバート・シンプソンは本質的に正しいと言わざるをえないだろう。この両国はやはり、好む、好まざるとにかかわらず、確かに「友人」なのである。カナダとアメリカは絡み合うように密接に結びついており、その関係が本当に決裂することなど、もはや考えも及ばないことだ。

実際、それぞれの国内のさまざまな価値観や考え方の相違は、おそらく両国間の相違と少なくとも同じくらい存在するのである。国内の論争が尽きることがないありさまをみると、両国は同じ穴の貉むじななのである。そして、一般人の情報源となるメディア報道などで見出しをにぎわすのは常に論争だけであるという点を忘れずにいることが非常に大切なことだろう。たいていの場合、ほとんどの事柄について、アメリカ人とカナダ人は、それぞれ互いに、またそれぞれ同国人同士でも、とてもうまくやっているのだということを忘れないようにしたい。☺

（翻訳原稿）